

最優秀賞 ◎ 敗北を抱きしめて上・下

あるアメリカ人が日本戦後史を描く

小澤 実(31才)松戸市

二〇〇四年になって、多数の写真を追加収録した増補版が出版されたので改めて購入し、再読した。再読ではあるが、その叙述の美しさに、その印象的な具体例の引用に、その構成の巧みさに、四年前に読み耽ったときと同じく深い感動を呼び起こされる。上下合わせて八百頁超という大部にもかかわらず、飽きることがない。相も変わらず私はジョン・ダワーという歴史家の腕に抱きしめられたままなのだろう。

『敗北を抱きしめて』という魅力的な題名の与えられた本書は、一九九九年にアメリカで原著が出版されるや、ピューリッツァ賞やバンククロフト賞など権威ある十を超える賞を獲得した。我が国においても、翻訳物であるにもかかわらず、大佛次郎論壇賞等の受賞という榮譽に浴している。初版刊行の際には様々な媒体の書評欄で専門研究者や著名文筆家に取り上げられ、そのたびごとに委曲を尽くした絶賛といつてよいほどの評価を得ている。さて、今更私が屋上屋を架すこともあるまいにとも思うが、再読して少し気になったことがあったので今キーボードを叩いている。

本書は、天皇による終戦の詔勅が出された一九四五年から、サンフランシスコ平和条約の締結により日本に国家主権が回復する一九五一年までのおよそ六年間を分析の対象としている。アメリカ流民主主義という「天降る贈り物」を手にした日本人が、占領軍と手を携え、いかにして日本国憲法に収斂する戦後日本の礎

を築き上げたのか、その複雑ながらも豊かな道行きがまるで目の前でスライドが繰られていくかのごとく叙述されている。文字と写真が織りなすこの物語の主人公は、特定の個人や権力者ではない。そこでは出征した夫の帰国を待つ農婦も、道ばたで拾ったシケモクをふかす少年も、戦中の禁欲から堰を切ったように次々と作品を送り出す文筆家も、法案の策定にあくせくする政治家も、そして地方を巡幸する昭和天皇すら、登場人物として等価なのである。

しかしながら、こうした日本に対する優しい眼差しとは対照的に、祖国アメリカに対するそれはかなり厳しい。いくつかの事例をあげてみよう。R A Aという慰安所や「パンパン」をつうじての、アメリカ兵による日本人女性の蹂躪。連合国の諸活動に対する極度に過敏な検閲制度。極東軍事裁判という名の、国際法の基準を著しく逸脱した一方的弾劾。原子爆弾の投下のその情報の隠匿。そして、中国における共産党政府の成立と朝鮮戦争を受けての、ご都合主義的な反共政策に起因する「逆コース」。ダワーは、アメリカ本国とその出先機関であるG H Qが主導した様々な対日政策は、結局のところ資本主義諸国の盟主たろうとするアメリカの国際戦略の一環であり、日本の民主化という壮大なる実験の根底には、戦前と相も変わらぬ劣位のアジアを教化しようという新植民地主義的な発想が横たわっているのではないかと訝しむ。日本を「十二歳の少年」にたとえたマッカーサーの傲岸は凶らずもその表出であり、たとえば国家主権を回復しても日本はアメリカの「保護国」にすぎないと。声高に弾劾するのではなく、どちらかと言えば淡々とした記述ではあるが、日本人があまりにも生き生きと描かれているがゆえに、アメリカの態度が余計に浮かび上がってくるのである。

これはアメリカ人ダワーによる「自虐史観」なのだろうか。いずれも、愛国主義的なアメリカ史叙述にあっ

ては、おそらくタブーとされる事柄であろう。それをためらうことなく告発し、多数の読者に突きつけている。私はここにダワーの良心を見る。彼が取り上げた事例は、いずれも歴史学的には（少なくとも現段階では）覆すことのできない事実である。仮にそれが自らのアイデンティティを損なうような事実であっても目を背けることなく対峙し、自らの研究対象の中に組み込むのが歴史家としての最低限の責務であるとするならば、ダワーはそれを見事に果たしている。私が歴史学に携わる者として本書に感動するのは、冒頭に述べた理由もさることながら、ダワーの歴史家としてのこうした真摯な態度にある。

本書は、ダワーが私たちに手渡した「天降る贈り物」である。受け取った私たちは、六十年前の父祖たちがそうしたように、この贈り物を十分に咀嚼して、自身の中に取り込んでいかなければならない、と思う。敗北の記憶に目を背けることなく、戦後を生き、戦後史を模索し続けることが、この類い希なるアメリカ人研究者に対する答礼であろうか。



敗北を抱きしめて 上・下 著者／ジョン・ダワー 岩波書店 2004年1月 各2730円

一九四五年八月、焦土と化した日本に上陸した占領軍兵士がそこに見出したのは、驚くべきことに、敗者の卑屈や憎悪ではなく、平和な世界と改革への希望に満ちた民衆の姿だった。（上巻）

敗北を抱きしめながら、日本の民衆が「上からの革命」に力強く呼応したとき、改革はすでに腐蝕し始めていた。身を寄せる天皇をかたく擁護し、憲法を骨抜きにし、戦後民主改革の巻き戻しに道をつけて、去った占領軍。（下巻）

新たに増補された多数の図版と本文があいまって、占領下の複雑な可能性に満ちた空間をヴィジュアルに蘇らせた新版。